

## 中学校家庭分野「家族」教育における教育評価の現状と課題 —全日本中学校技術・家庭科研究会機関誌を対象として—

### Current Status and Issues of “Family” Education Evaluation in Junior High School Home Economics : Analysis of “Theory and Practice” Published by All Japan Industrial Arts and Home Economics Studies Group

永田夏来\* 村田晋太郎\*\* 山本亜美\*\*\*  
NAGATA Natsuki MURATA Shintaro YAMAMOTO Ami

本研究の目的は、中学校家庭分野における「家族」教育での学習評価の実態把握および課題の検討を行い、「指導と評価の一体化」について検討する基礎的資料を得る点にある。そのため、全日本中学校技術・家庭科研究会による機関誌『理論と実践』の計6年分19本の論文について分析を行った。「形成的評価」及び「総括的評価」に関する記述の出現が少なく、実践の改善や有用性の検証に至っていないかは定かではないこと、評価方法は単一的であり、事前と事後のアンケート調査による分析やワークシートの記述の質的分析などが明らかとなった。また、評価規準・評価基準が揃って記述されているものが約7割、揃っていないものが約3割であった。評価規準・評価基準に関する記述の分析の結果から、評価の「妥当性」及び「客観性」が担保されていないことが言える。

キーワード：中学校家庭分野，教育評価，「家族」教育，全日本中学校技術・家庭科研究会，機関誌「理論と実践」

Key words : Junior High School Home Economics Education, Education Evaluation, Family Education, All Japan Industrial Arts and Home Economics Studies Group

#### 1. 研究の背景および目的

家庭生活領域が新たに設置された1989年改訂学習指導要領以降、家庭科教育において「家族」はその中心に位置付いたとされる。それに伴い、「家族」を教えることへの困難性も指摘されるようになり、これまでいくつもの調査分析が行われている。高等学校教員へのインタビューから「家族」教育の困難について取り上げた片田江（2010）は、現場の教員が戸惑いや悩みを抱えながら家族の実践を行っていることを明らかにした。また、濱崎（2013）は、構築主義に基づき、小学生を対象にした授業実践における「家族」知の理論的な枠組みを提案している。これら先行研究が指摘する課題は、実践者を含む社会全体の「家族」に対する認識、家族について「あるべき姿」を前提とする近代家族規範が教育実践を逆に困難にしている様子を浮き彫りにするものであり、専門的知識と生徒への配慮や効果的な学習という課題の前に解決すべき課題が数多く残されていることを示している。

同様の問題関心から小学校・中学校・高校・大学の家族についての授業実践が記された書籍を対

象に調査研究を行なった伊深（2016）は、「内容、方法・教材」の観点で教材分析を行い、「家族」教育に対する実践者が熱心に題材設計を行ってきた成果を明らかにしている。また、村田ら（2017）は、中学校家庭分野に限定し、実践論文を対象とした分析を行うことで「家族」教育の現状と課題を明らかにした。そこで示唆されたのは、学習目標が抽象的かつ曖昧であることから学習評価の妥当性が低くなっているという実践論文における現状である。「家族」教育を実践する教員は、近代家族規範に対する反省的な視点を保ちながら、実践の工夫によってその課題を乗り越えようとしてきた。教材工夫や教師の高い問題意識に基づき「よりよい」「家族」教育が熱心に行われてはいるものの、授業を通じてどのような力を育成するのか、どのような方法で生徒の学習を通じた変容を看取ればよいのかといった実践の基軸については未だに大きな課題を抱えているものと予想される。

2016年12月に出された答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、「学習評価は、学校における教育活動に関し、子供た

\*兵庫教育大学大学院教科教育実践開発専攻生活・健康・情報系教育コース 助教

平成29年4月26日受理

\*\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所（博士課程）先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座

\*\*\*兵庫県立有馬高等学校

ちの学習状況を評価するものである。「子供たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる」とある。これからの指導要領においては指導と評価を一体とした授業実践が求められており、この方針を踏まえた実践の開発及び開発に関わる教員の資質向上は喫緊の課題と言えるだろう。困難が指摘されてきた「家族」教育における学習評価とは、これまでどのように行われてきたのだろうか。本研究ではこの点に注目し、実態の把握及び課題の検討を行う。次期学習指導要領で目指されている「指導と評価の一体化」の基礎的資料の作成を目指すことを目的とする。

表1

通し番号	発行年	家族地域	保育
A	H21		○
B	H21		○
C	H21	○	
D	H22		○
E	H22	○	
F	H22	○	
G	H22		○
H	H23		○
I	H23		○
J	H23		○
K	H24		○
L	H24		○
M	H24	○	
N	H25	○	
O	H25		○
P	H25	○	
Q	H26		○
R	H26	○	
S	H26		○
		7	12

## 2. 研究の方法

### 2.1. 実践論文のデータ化（評価に関する記述の抜き出し）

本研究では、全日本中学校技術・家庭科研究会が毎年発行する機関誌『理論と実践』を対象とした分析を行う。（鈴木ら、2005）によれば『理論と実践』に掲載される実践研究とは、日本国内を網羅する各地域の中学校の研究・実践であること、殆どの全国の中学校家庭科教員が目を通す雑誌であり、家庭科教員に多くの影響を与えている」とされる。中学校家庭分野における実践を俯瞰する題材として一定の基準を満たしていると考え、本研究の対象として選定した。なお、今回は、平成20年告示学習指導要領が出された以降に刊行されたNo.48（平成21年度）からNo.53（平成26年度）の計6年分のうち、A領域「家族・家庭と子どもの成長」を扱った19本すべての論文を対象としている。19本の論文について、発行年順にそれぞれA～Sのアルファベット（通し記号）を付して区別をした。発行年及び対象とした内容（「家族・地域」もしくは「保育」を対象とした実践で分類した）を含め、表1に示す。

村田ら（2017）は、この資料を「実践の目的」「実践の方法」「実践の結果及び考察」の3構成に分け、実践論文を一文ごとに読み上げた上で通し番号を付けた上で、タグを付け、全27タグを生成している。27タグについては、表1に示す。また、この27タグの内、【評価の対象（評価規準）】【評価の材料】【評価の段階（診断的評価）】【評価の段階（形成的評価）】【評価の段階（総括的評価）】【生徒の変容】の6タグに再度注目することで、実践研究における学習評価に関する側面を捉えることができると思う。

表2

構成	タグ	合計
目的	汎用的な能力	39
	題材目標	59
	教師の目標	64
	領域	33
	題材	123
	これまでの取り組み	47
	社会的背景	35
	発達課題	6
	学校や地域の様子	34
	グループ学習	106
方法	一斉授業	16
	個別学習	14
	実践的・体験的な学習活動	119
	問題解決的な学習	72
	教材・教具	120
	メディア	93
	発問	10
	指導方略	195
	学習課題	6
	評価の対象（評価規準）	3
結果・考察	評価の材料	4
	診断的評価	76
	形成的評価	34
	総括的評価	13
	生徒の変容	204
	成果	57
	指導上の課題	62
合計	1644	

### 2.2. 評価シートによるデータ化

上記の学習評価に関する6タグに該当する記述を抜き出し、その記述の周辺にある文章についても吟味しながら、論文ごとに表にまとめた。この表を本研究では、評価シート（図1）とよぶ。評価シートは、「評価の目的」「評価の方法」「評価規準（何を評価したのか）」「評価基

教育の目的	教育の方法	記述	評価規準	記述	評価基準	記述
診断的評価	質問紙	12~	幼児についての学習への興味 幼児についての学習の必要性 幼児と遊ぶ機会の頻度		特になし	
	質問紙	47	幼児についての学習への興味 幼児についての学習の必要性 幼児とのふれあひへの楽しみ 幼児と遊ぶのが得意か	47	あるorなし 楽しみor楽しみでない 得意or不得意	表 1
	記述なし	31	意欲	31	生徒の意欲が向上した	31
形成的評価	質問紙	63~	幼児についての学習への興味 幼児についての学習の必要性		男子 ある群が44%→66% 必要群が72%→94% 女子 興味必要性とも増えた 両方 必要ないと答えた生徒は01になった ・関心が高くなった ・イメージがよくなった →授業前より幼児がすきになった →実際に遊んでみで幼児の印象が変わった →思っていたより幼児と遊ぶのが楽しかった →授業を通して幼児についてよわかった	
	質問紙	68~	幼児についての学習の関心 幼児のイメージの変化		幼児の身体的特徴を踏まえた関わり方を記述している	表 2
	ワークシート	73	幼児とのかかわり方の工夫	73	思っていたよりや 意外となどの表現がある	表 3
	ワークシート	75	幼児についての先入観や思い込み等に気づき、 幼児への関心と理解を深める	75	高まった群 男子67% 女子78%	
	質問紙	79	幼児と遊びたい気持ちの高まり	79	具体的であり、ふれあひ体験での反省し 改善しようとするところが記述されている	表 4 5
総合的評価	質問紙	79	よりよ関わるうとする意欲と態度			

準（どのような基準で評価したか）」の4観点を盛り込んで作成した。

本分析における「評価の目的」とは、学習の出発点における学習適性やレディネスを把握することを目的としている「診断的評価」、子どもの学習や教師の授業方法あるいはカリキュラムなど、教育課程において行なわれている活動の改善を目的としている「形成的評価」、教育活動の効果や有効性を測ることを目的としている「総括的評価」の3つをさす（二宮, 2015）。本分析ではまずこれら3つを分類し、さらに「評価の方法」「評価規準」「評価基準」「評価の方法」について検討を行った。「評価の方法」においては、質問紙による定量的な方法を用いているのか、ワークシートによる記述や課題の作成など定性的な方法を取っているのを区別している。また、どのような能力を見出そうとしているかについては、学習を通じた生徒の変容の報告や成果物をはじめとした具体的結果を考察している箇所を中心に抽出し、どのような基準でねらいが達成されたとしているかを区別して「評価規準」「評価基準」にそれぞれ分類した。

### 2.3. 分析方法

作成した評価シートをもとに、「評価の目的」「評価の方法」「評価規準（何を評価したのか）」「評価基準（どのような基準で評価したか）」の4観点それぞれに見られる傾向について、以下の3点に注目し検討を加えた。ひとつめは、評価の機能ごとの記述出現数から、実践における評価の機能がどの程度活用されているか。二つめは、評価方法の傾向を読み取ることで家族を対象とした授業における評価の仕方。三つめは、評価規準では、家族の実践においてどんな能力を看取ろうとしているかを把握し、評価基準ではその能力をどんな段階に分けて評価を出しているかである。

## 3. 結果及び考察

### 3.1. 評価の機能についての結果

実践論文上に記載されていた評価の3つの機能を抽出

した結果、表2にあるように診断的評価は76箇所、形成的評価34箇所、総括的評価は13箇所であった。またこれらのタグが記載されている論文数は、診断的評価は12本、形成的評価は4本、総括的評価は7本であった（図2）。記載が確認された箇所については総括的評価が最も少なかったが、掲載されている論文数では形成的評価が最も少ない4本であった。掲載箇所と論文数でこのような差異が生じているのは、論文1本あたりで確認することができたタグの数に違いがあるためである。そこで、表2及び図2から1本あたりのタグの出現数は、診断的評価は6.33回、形成的評価は8.50回、総括的評価は1.86回であった。

以上の結果から、実践者の評価に関する機能への意識について以下のように推察することができる。まず、診断的評価は、タグの出現及び掲載論文数共に高い数値を示していることから、「家族」教育においては意図的に盛り込まれている様子が明らかとなった。このことは生徒の実態（レディネス）を把握した結果を踏まえて実践が開始されている現状を示しており、学びによる変化への関心の高さを示すものと思われる。形成的評価の実施を確認できた論文は非常に少なかったが、一本あたりの出現回数は最も多かった。形成的評価を実践に組み込み、論文で紙幅を割いて論じている教員は「家族」教育の改善を実践中に適宜行っていると推察される。一方、ほとんどの論文では形跡的評価に関する記述を確認することができず、実践の改善を目指しているとは言い難い。そのため、形成的評価に関する記述の有無を考察することで、「家族」教育の実践者自身の認識が二分化されていることがわかる。総括的評価に関しては、1本あたりのタグ出現数が非常に少なく、一文から二文程度報告されているだけである。総括的評価の機能は教育実践全体の効果や有用性を確認するためのものであるにも関わらず、記述量が低いことは「家族」教育を単元レベルで評価がし難いという課題を教師自身が抱えていることを反映しているものと言えるだろう。

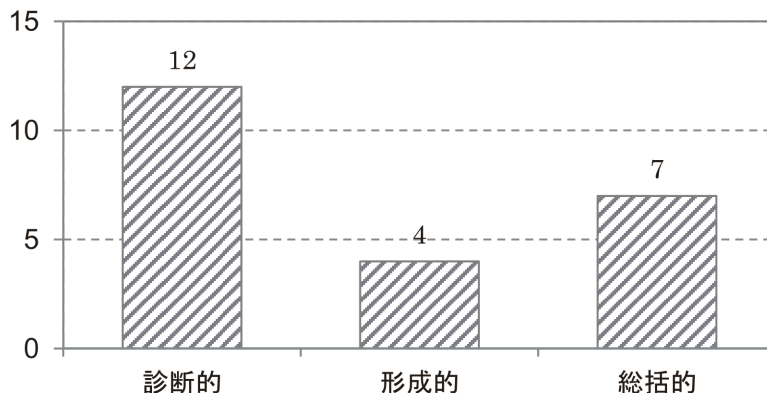


図2

### 3.2. 実評価方法についての結果

全19本の中から、診断的評価・形成的評価・総括的評価の3機能と読み取れる記述を102カ所抽出した。102カ所で行われた評価の方法についてまとめたものを表3に示す。結果として、アンケートで評価を行ったものが27カ所(26.5%)であった。このアンケートによる評価は診断的評価で13カ所、総括的評価で14カ所とほぼ同数であった。実践を通じた生徒の変容を事前と事後で比較する手法は、「家族」教育の評価方法として最も用いられているものと思われる。次に、どのような評価方法を活用したかが明記されておらず、読み取れないものが19カ所(18.6%)あった。具体的には、生徒のレディネスや学習を通じた変容(最終的な実践全体の評価)についての記述はあるものの、その方法については記載されていないものが該当する。3つ目は、生徒がワークシートに記述した内容を評価する方法である。全16カ所あり、14カ所が総括的評価の機能を持っていた。最終的な実践の評価方法としてワークシートを活用した実践が多いことがわかった。4つ目は、生徒の授業の感想を評価の対象にしたものである。これは、10カ所見られ、すべてが総括的評価として実施されていた。5つ目は、授業内でのワークシート以外の課題作成はそれぞれ9カ所確認できた。ここでは課題作成とは、製作品の作成や劇やペーパーの作成、標語・手紙・スクラップなどを指す。機能としては、診断的及び形成的評価が1カ所ずつ。総括的評価が7カ所と、主に学習の成果として課題に取り組ませていることが多かった。最後は、教師が実践の中で観察した生徒の様子を評価したものは8カ所確認できた。また、内実は診断的評価が1カ所、総括的評価が7箇所であった。概ね実践の最終的な成果として観察が用いられていることがわかる。

表3

評価方法	全記載数	診断的評価 (12本)	形成的評価 (4本)	総括的評価 (7本)
アンケート	27	13	0	14
不明	19	1	1	17
ワークシート	16	0	2	14
感想	10	0	0	10
課題	9	1	1	7
観察	8	1	0	7

### 3.3. 規準・基準についての結果

ここでは、評価シートで確認された「評価規準」及び「評価基準」の関連について示していく。なお、ここで言う「評価規準」とは、実践においてどのような能力を獲得させたいか、どんな力の育成を目指しているのかを表す記述を指す。「評価基準」については、どのような生徒の様子や成果をもって規準が達成されたかとみなされたかと読み取れたものを指す。表4は、「評価規準」

及び「評価基準」と読み取れた箇所と読み取れなかった箇所を二次元のマトリックスで表したものである。全102箇所の学習評価に関する記載があったものの中で、72カ所(70.6%)で「評価規準」及び「評価基準」の両方の記述が確認できた。次に、「評価規準」のみ確認できたものは10カ所(9.8%)、「評価基準」のみ確認できたものは18カ所(17.6%)であった。最後に、評価活動を行っている読み取れる記述はあるものの、「評価規準」及び「評価基準」に関する記述が両者とも記載されていない論文は2ヶ所であった。

評価に関する記述の7割程度の箇所で、「評価規準」及び「評価基準」が確認できたことは指導と評価の一体化に即したものと言える。だが、約3割の箇所では「評価規準」もしくは「評価基準」の記述が抜け落ちている。何を評価したかは読み取れないが評価の結果は記載されている箇所。あるいは、何を評価するかは書かれてはいるものの、どのような姿が達成されたものといえるかは記述されていない箇所がそれに当たる。

表4

N=102		評価規準	
		記述あり	記述なし
評価基準	記述あり	72 (70.6%)	18 (17.6%)
	記述なし	10 (9.8%)	2 (2.0%)

### 3.4. 授規準・基準に記述された内容

ここでは、主に「評価規準」及び「評価基準」と読み取れた記述の内容についてまとめる。まず、「評価規準」と読み取れた記述としては、『家庭や家族の基本的な機能と地域との関わりについて理解している』のように、平成20年公示学習指導要領に示された抽象度の高い文章が多く見られた。また、『根拠に基づいた記述をしているか』のように、家庭科固有の「つけたい力」ではなく、教科教育のみならず学校教育全体でつけたい能力を設定した論文も見られている。次に「評価基準」であるが、評価規準に『最適な方法を状況に応じて選択し活用していく力』と設定されている論文においても、『家族に理解してもらいたいという気持ちが強かったけれど、自分も家族を理解してあげる必要がある』と生徒がワークシートにて記述した感想文を直接転載するに留まった論文が多かった。感想をデータ化し、類型を示すなど質的に分析した論文は今回の分析においては確認できなかった。

## 4. まとめと今後の課題

### 4.1. 評価の機能とその方法

村田ら(2017)では、学習目標が曖昧で抽象的なものが多く、学校評価の妥当性の低さが低いことを「家族」

教育における問題点としきた。本論ではそれを踏まえた上で学校評価に注目して分析を行い、中学校家庭分野における評価の現状を把握することを目的とした分析を行った。

実践論文における学校評価の機能には、「診断的評価」「形成的評価」「総括的評価」の3つの機能があるが、今回の実践論文では、事前、事後の調査としてアンケート形式のものが多く採用されていたということもあり、「診断的評価」に関する記述が多かった。作品や課題、授業中の生徒の様子などから、診断的な評価がされている場合もあったが、実践論部において採用されている評価はほとんどがアンケート形式によるものであった。また、「総括的評価」についても、「診断的評価」と同様、事後調査としてアンケートやワークシートを使った評価方法が多く見られた。このことから、授業実践の際に生徒の変容をはかるための方法として、アンケート調査が一般的な手段として認知されていることが考えられる。家庭科は実践的な科目でもあるため、課題製作による評価もされている。しかし、「総括的評価」について、評価を実施したと記載はあるが、どのような内容で評価を実施したのかという記載があまりなかった。そのため、実践論文からは実際にどのように評価がされているのかを把握することには限界があり、別途調査の必要性が示唆された。

「形成的評価」については、「診断的評価」や「総括的評価」と比べ、記述があまり見られなかった。これについても、実践論文からのみでは、現状を読み取ることには限界はあるが、分析の傾向として、子どもの学習・教師の授業方法・カリキュラムなどの教育活動の改善を目的とした「形式的評価」についての記述は、実践論文にはあまり見られないことが示唆された。

#### 4.2. 評価規準と評価基準

「評価規準」と「評価基準」の両方の記述については、全体に対して、7割程度の論文で確認することができた。「評価規準」については、学習指導要領に示されているような抽象的な記述が多く、評価する内容として家庭科で習得する能力ではなく、学校教育全体としてつけさせたい能力を設定しているケースも多く見られた。こうしたものは、評価規準としては不十分であり、具体性に欠ける点も合わせて実践論文上の困難として指摘できるものである。「評価基準」については、ワークシートから読み取れる「生徒が記載した感想」の記述はあるものの、生徒の感想文それ自体を対象とした分析はされておらず、どのような根拠に基づいて評価基準を設定したのかは、不明確なものが多く見られた。

#### 4.3. 今後の課題

本調査は実践論文を対象としたテキスト分析であり、各実践の傾向について、ある一定の基準を用いて俯瞰的に情報を把握することを目的としたものである。しかし、『理論と実践』には各論文概ね4ページという紙幅の制限があり、単元全体を詳細に記載することは難しいのが実際である。そのため、研究の目的・方法・結果及び考察の各要素すべてを満たした論文は少なく、実践は行っているものの論文における記述は割愛されている可能性も考えられる。報告が欠けている内容であっても実践には組み込まれている状況が推察され、授業実態の把握という点においては『理論と実践』を対象とした分析では限界があるものと思われる。今後の課題としては、論文の執筆者を対象にしたインタビュー調査や実践をウィールドワークという形で観察を深め、質的な調査分析による補完が必要となるものと思われる。そうした調査を行うことで、今回根拠を示すことができなかった「家族」教育の背景をより明確にできるであろう。また、アンケート調査以外の診断的評価方法の検討、評価規準についての具体性についての検討を行い、これまでの分析結果を踏まえ、形成的評価に重点をおいた授業内容の検討、翻案のための学習内容について検討することも課題であると言える。

#### 引用文献

- 濱崎タマエ. (2013). 構築主義的家族研究に根差した小中学校家庭科における『家族』教育実践. 日本家政学会誌, 64 (12), 779-789
- 伊深祥子. (2016). 家庭科における家族の授業分析. 日本家庭科教育学会, 58 (4), 232-239
- 片田江綾子. (2010). 家族について教えるということ—家庭科教員の家族教育体験に関する現象学的研究—. 日本家庭科教育学会, 53 (1), 22-31
- 村田晋太郎・山本亜美・永田夏来. (2017). 実践論文に見る中学校家庭分野「家族」教育の現状と課題—全日本中学校技術・家庭科研究会機関誌「理論と実践」を対象として—. 日本家庭科教育学会, 60 (1), (印刷中)
- 鈴木智子. 得丸定子. (2005). 食領域の研究動向に関する一考察—「中学校技術・家庭 理論と実践誌」と「日本家庭科教育学会誌」の分析—. 上越教育大学研究紀要, 25 (1), 171-183
- 二宮衆一. (2015). 教育評価の機能. 新しい教育評価入門—一人を育てる評価のために—, 52-75